淫宴玩弄上

性開発される処女巫女姉妹

妄想虜囚

カバーイラスト　STUDIO WALTZ

淫宴玩弄　上

性開発される処女巫女姉妹

試し読み版

妄想虜囚

カバーイラスト　STUDIO WALTZ

目次

人物紹介……8
プロローグ……9
第一章　姉妹と性の乱れ……11
第二章　姉妹と初恋……35

人物紹介

亜衣（あい）……天神学園に通う天神子守衆の巫女。麻衣の双子の姉。得意な武具は弓。腰まである長髪のポニーテールがトレードマーク。天女の血を受け継ぎ天神に仕える羽衣の戦士。いやらしい男が大嫌いで淫らの誘惑に対抗できる強靭な精神力を持つ。

麻衣（まい）……亜衣の双子の妹。亜衣と同じく天神に仕える巫女であり羽衣の戦士である。ショートボブの可憐な娘。薙刀術を得意とする。

幻舟（げんしゅう）……天神子守衆当主、麻衣の祖母。正確には亜衣、麻衣は幻舟の妹の孫娘に当たる。早世した亜衣、麻衣の母に代わり姉妹を厳しく育てた。

鬼麿（おにまろ）……天女の血と鬼の血をともに持った鬼子。光の御子となるべく木偶の坊に育てられ各地を放浪していたが、現在は天津家に保護されている。

木偶の坊（でくのぼう）……鬼麿の従者。鬼麿と同じく天津家に保護されている。

鬼夜叉童子（おにやしゃどうじ）……地上を淫乱と混沌に満ちた世界に変えようとする鬼獣淫界の首領。不滅の魂を持つ。世の乱れに乗じて復活し、世界を守ろうとする天神子守衆と永きに渡り戦いを繰り返した。

藤原光時（ふじわらみつとき）……鳳凰学院の生徒。弓道部所属。亜衣と同じく地域の伝統的な弓勝負である天神奉納弓試合に出場予定の選手。

プロローグ

日本全国各地に伝わる天女伝説――。

細部は違えど大筋はだいたい一致している。湖のほとりに水浴びに降り立った天女が、その美しさに見惚れた男によって羽衣を隠され、天に帰れなくなる。執念深さに負けた天女は男と子を成す。天女は血脈を残して天に帰ったとも伝えられれば、我が子を大事に育て地上で生涯を終えたともされる。いずれにしても天界の貴人である天女は人間の浅ましさも博愛を持って許し、情愛の深さを慈しんだという。

それは単なる伝承ではなく誠のことだった。天神学園に通う双子姉妹、天津亜衣と天津麻衣。彼女たちこそ地上に残った天女の末裔である。亜衣も麻衣も天女の血を受け継ぐにふさわしい、容姿も心根も美しい少女であった。

天から降りたものがいれば暗く深い地の底から這い出たものもいる。やつらこそ鬼獣淫界。混沌と淫乱がはびこる地獄へ変えようとする淫鬼、淫魔たちが結集した邪悪な闇の一族である。天神を祀る天津家は、天女から託された羽衣と聖なる雷の力で人知れず世界を守ってきた。

人間社会がどれほど発展しようとも人々から欲は消えない。むしろ繁栄に比例し

て欲望の総量は増え続けてさえいる。
地下深くに封じた鬼獣淫界がまたよみがえろうとしている。人々から漏れ出した肉欲の雫は彼らの糧となり、復活の刻が迫っていた。

先祖から天女の羽衣を継承し、天神の巫女としての使命を祖母、幻舟より伝えられた亜衣と麻衣は鬼獣淫界第一の刺客、白毛鬼を討ち果たした。
だがそれはほんの手始め――。
天津姉妹に新たな魔の手が迫っている。真の戦いの始まりであった。けれども花開いたばかりの美しさと同様に彼女たちはまだ羽衣戦士の本当の力に覚醒していない――。

第一章　姉妹と性の乱れ

1

級友になかばむりやりに連れられて鳳凰学院弓道部の練習を見学した。間近となった天神奉納弓試合で姉と対戦することになる謎の転校生、藤原光時を偵察するというのが目的だったが、そこで見た藤原光時はうわさに違わぬ美青年だった。

天津麻衣はそのときの衝撃が忘れられない。

弓を構えた藤原光時は矢を射る直前にチラリと麻衣を一瞥した。光時の一射は見事に的の中心を射貫いたが、それだけに及ばなかった。的が射貫かれたと同時に麻衣の胸も目に見えぬ矢が突き刺さった。そんな感覚を麻衣は覚えた。

鳳凰学院は弓の名門である。転校して間もないのに射手に選ばれただけであって、射形には学生離れした厳かささえ感じられるほどであった。キャーキャーと騒いでいた女性ファンも光時が弓を構えるとシーンと静かになる。弓道衣で歩く姿もじつ

に様になって、長髪に伸ばした髪型と整った貴族的な顔立ちと相まってまるで平安武者が現れたのではないかと麻衣ですら錯覚させた。

あれから三日が経った。麻衣の胸には射貫かれたような感覚がまだはっきりと残っている。

麻衣は黒目がちな瞳で遠くを見つめた。ショートボブの身ぎれいな髪型がよく似合っている。少女がまるで舞を踊るようと評されるほどの薙刀の名手であるとは、そのあどけない顔立ちからは想像できないだろう。

麻衣は恋をしたことがない。男嫌いを自称するほどの姉と違い、人並みに恋への憧れはあるし、男子への興味もある。けれどもそれが恋に恋するといったまだ未熟な感情であることを理解していたし、運命の人との出会いをゆっくりと待っていればいいと考えていた。

女子校で待っていたらあっという間に卒業、青春なんて終わってしまうよとクラスメートたちは笑うけれど、巫女として貞操を大事に守りたいとも思っていたのだ。

胸の奥にトゲが刺さったようなチクリとする痛みがある。これは初恋なのだろうか。

大切な巫女舞の練習にも身が入らず、祖母、幻舟にも叱られてしまった。

麻衣に影を落とす胸の痛み。初恋などとはほど遠い、それがどれほど危険なものであるのか。彼女はこれから知ることになる――。

2

「麻衣ったら、はしたないんだから」

そう言ったものの亜衣は双子の妹から目が離せない。

巫女には様々な役務がある。とはいえ休憩をどう取るか、なにをするかは各個人の自主性に任されている。だから放っておけばいいものを、ふらふらと麻衣が境内の裏手へと歩いているのを見かけると亜衣は後を追ってしまった。

さぼっているのをとっちめてやろう。ちょっとしたいたずら心が働いたゆえでもあるが、その本心は幻舟に雷を落とされて落ち込んでいないかと心配したためだ。姉の亜衣の目から見ても麻衣はどこか心ここにあらずといった様子で集中力を欠いていた。胸騒ぎを覚えたのも事実である。

だが、余計な気を回したおかけでこんな光景を目にすることになるとは――。

亜衣は理知的な瞳を心なしか潤ませていた。

天津姉妹が仕える神社は小高い丘の上にあるから裏手の崖は見晴らしがよい。夕焼けがよく見える。亜衣と麻衣の双子姉妹はここから見る景観を眺めて育ったのだ。

麻衣は天然石に腰掛けている。椅子代わりとするには手頃な巨岩である。その手

がもそもそと動いているのだ。ときおり崩れかけた理性を立て直すように榊(さかき)をみつめる。神具である榊を見て気を紛らわそうとしているのだろう。だが、それもむしろ逆効果にしかならないようで、麻衣の手は明らかに自らを慰める動きとなっていく。

「破廉恥だわ」

息を潜ませながら亜衣はつぶやく。精白な巫女装束なだけに胸元がはだけた姿がひどくふしだらに感じられる。麻衣の手が乳房をこね回すと襟元がぐっと開いて日の光を浴びていない白い肉丘までもが露わになった。姉妹ふたりで風呂にも入るしお互いの裸など数えきれぬほど見ているが、汗を光らせた乳肉のまばゆい白さがひどくなまめかしい。

思いがけぬことに亜衣はどうしてよいのかわからない。亜衣とて性欲はある。けれども肉欲に支配されてなどはいけない。天神に仕える巫女ならば精神を統一し、迷いを払うべきだ。一方で性愛への欲が人として女性として、自然でもあるのも知っているのだ。麻衣がしているのが“オナニー”すなわち自慰行為だということも承知している。だがどう声をかけてよいものかわからない。亜衣は知識として知るだけでオナニーをしたこともなければ見るのも初めてだった。

姉に密戯を見られたと知ったら麻衣はとても傷つくだろう。かといって立ち去り

もせずに亜衣は木陰から妹の自慰行為を見守っていた。
（これじゃあ、ただののぞきよ）
麻衣よりも己の方がいやらしい気さえする。ほんの五メートルの距離で音を潜んで隠れ見ているのだから――。
なにかに促されるように麻衣は胸元を大きく開いた。柔らかな膨らみ。バージンピンクの乳首。麻衣の乳房に陽光を浴び輝いている。
きれいだわ――。
鼓動の高まりを示すように静かに弾ませた乳房は、姉の亜衣から見ても美しく輝いて見えた。ありとあらゆる穢れとは無縁の存在。麻衣が純潔の乙女であることを乳房だけでも示しているようだ。しかし、妹の処女性に感嘆した時間は長く続かない。
あろうことか妹は手にした榊をそこに近づけた。
「そんなことをしてはいけないわ」
思わず忍び声が大きくなる。
麻衣が榊で乳首をさすり始めたのだ。巫女にとって榊は神事に使う神聖な枝葉である。麻衣の腕が動き始めた。神聖な榊を自分を慰めるために使ってよいわけがない。やめさせなければならないが足に根っこが生えたように動かない。足が動かな

いならもっと大きな声で注意すればよいのだし、小石を投げて犬猫がいる気配でも立てればいい。だが亜衣はそれさえもしなかった。

「ああ……」

亜衣の口から吐息が漏れた。亜衣の手は妹をまねるように懐に潜り込んでいた。木を陰に身を隠すように姿勢を低くした亜衣はいつしか四つん這いになって乳房を揉みしだいている。まだ硬さの残る乳房は強く握ると痛みが走る。こんなことが気持ちいいのかしら、と半信半疑ながらも自分のなかの女の部分を掘りだそうと指先は乳肉を摘まんでいる。

「淫らだわ」

頬を紅く染めて亜衣は呟いた。麻衣がいつになく淫らに見える。自慰行為ばかりではない。無邪気にはしゃぎいつまでも子供っぽいところが抜けない妹があんなにも女であることを発露している。小鼻を膨らませながら切なげに吐息を漏らす表情も、あご先から首筋を流れる汗もおんなの性をありありと感じさせるのだ。亜衣が正気ならばそれが見当外れではないことがわかっただろう。麻衣は淫らの視線に魅入られていたのだ。麻衣をあぶる視線が亜衣にも伝搬したようでカラダが熱い。

麻衣が巨岩に体を預けた。ほとんど仰向けに寝そべっている状態である。そうなると手淫の動きがよくわかった。榊をかすれさせるだけでなく、空いた左手で乳房

を絞り上げ、隆起した頂を責めている。葉のふちを使ってぷっくりと立ち上がった乳首の根元に回している。

乳首をさする麻衣の手が下に向かった。あろうことか麻衣は袴のわきからなかに榊を潜り込ませた。腕を動かし、乳首でそうしたように陰部をこすっている。

「だめよ」

それは亜衣自身にも投げかけた言葉だった。紅袴の結び紐を亜衣は緩めていた。体奥から湧き上がる熱が、それとも汗ばむふとももの湿り気がそうさせたのか、亜衣もまた牝の本能に突き動かされつつあった。

紅い袴とともにショーツまで降ろしてしまう。外気が素肌に触れてもどかしい気持ちが楽になった。それはつかの間で体のなかに衝動がたまっていく。

「どうしたらいいの？　こんな気持ち……」

亜衣は自問した。自慰をしたことさえない無垢な姉巫女は性衝動を沈める方策を知らないのだ。

――アッ、アッ。

麻衣はもはやあたりをはばかりもせず甘ったるい声を上げている。紅袴を押し上げて榊の葉で陰部をさすっているのが見て取れる。犬の姿勢で妹の恥戯をみつめる亜衣の腰がやるせなさそうに揺れ動いていた。

そのとき湿った空気が流れた。それは腰にまでかかったポニーテールというには長すぎる亜衣の後ろ髪をほんの少し揺らしただけであったが、彼女にはそれで十分だった。亜衣は穂先をつかむと腰を掃いた。これではっきりと心地よさを再確認したのか、うっとりと表情を緩ませる。

亜衣はそのままポニーテールの穂先で尻肉を撫でた。そして穂先はじょじょに彼女の核心部分へとちかづいていくのだ。

――あんッあんッ、ああんッ。

――はあっはあっ、はあんっ。

妹の嬌声をなぞるように姉の荒い声が追いかける。

麻衣の胸元は完全にはだけて双乳がまろびでていた。薄桜色の乳頭を細い指先が転がし、押しつぶし、指腹でつまんでいる。亜衣もそれと同じく自らの乳房を愛撫した。

「なんなのこの感覚は……」

風呂で自分の体を洗うときには全く感じたことのない――それは初めて知る快感だった。邪鬼になぶられたときには不快でしかなかった感触がいまは新たな心地よさが次々と生まれていく。麻衣がどういじったらよいのか教えてくれた。指先をかすれさせ、爪も立ててみる。くすぐったさや痛みも混じるなか、二度三度と同じよう

にいじると快感が増していく。
「あんっ、あっあっ……」
亜衣も妹のように甘い声を漏らしていた。はっきりとよがり声だとわかる声だった。両手を使って淫戯を行う亜衣は草むらに這いつくばりながらも、顔はしっかりと麻衣に向けて一挙一動をみつめている。
麻衣の手の動きが激しくなった。激しくなったといってもただ動きが速まったわけではない。麻衣は女性器の縦溝の始まりから付け根までくまなく榊でこすり上げているのだ。袴のなかでのことなれど、いまの亜衣には妹が何をしているのか理解できた。
「麻衣、いやらしいことしないで……。わたしまで……」
より深く快楽を求める妹をとがめることはもうできない。亜衣は這いつくばり、尻だけを高々と掲げた淫らな姿であったが、その尻を前へとせり出した。敵の攻撃をのけぞり躱しながらも、亜衣が弓を射れるのは鍛え抜かれた柔軟性があってこそである。
体操選手にさえ迫る軟体ぶりをみせて亜衣はくいっとからだを折り曲げて掲げた尻を頭に寄せた。するとただでさえ長い髪は陰部まで楽々届くようになる。巫女姿の亜衣は和紙で作った髪留めで根元だけでなく穂先近くまで髪を結っている。毛先

はばらけず筆のようにまとまり、亜衣は縦裂をそれでなぞった。毛髪はときおり尻の穴をかすめるがそれさえも心地よかった。

「あん、ああっ……どうしてこんなことが……」

妹が榊を慰める道具にすれば、姉は自らの毛髪を淫具としている。巫女姉妹はともオナニーに没頭していった。

麻衣は手を動かすだけでなく、腰までせり上げて榊での摩擦を強めている。股間をクイクイと持ち上げた姿がなんとも卑猥だ。いやらしいと思いつつも亜衣の尻も淫猥に揺れてしまう。手入れの行き届いた長髪は一本、一本にコシがあり、ほころびた肉花の隙間に入り込み、粘膜に直接触れると電気が流れたような強い快感を生み出した。

「もうやめなきゃ――。アアン」

言葉にしたのはより強い意志を表したためでもあったが、それが口先だけなのははすぐに自覚できてしまう。なまじ初めてのことだから拒めないのだろうか。いやそれは言い訳だ。陰裂をなぞればなぞるほど湧き上がる快感の虜に亜衣はなっていた。麻衣がより強い快感を求めたように亜衣も動きも猥褻になっていく。乳房を愛撫する手を止めて、むき出しになった股間に伸びる。あふれ出た愛液は陰毛をぐっしょりと濡らしていた。さらに源泉を求めて指先が伸びる。汚れを知らない乙女の

そこは自らの愛撫にもかかわらず楚々としたたたずまいを保っていた。淫蜜を一、二度塗り伸ばすと亜衣は秘所にあてがった二本の指で肉扉を押し開く。

――トロッ。

愛液のしたたる淫らな音が聞こえた気がしたのはその量が手首まで流れるほどだったためか。初々しい肉花が咲き開き、サーモンピンクの内部が露呈した。

いよいよ亜衣はポニーテールの穂先を触れさせた。

「ううっ……」

思わず亜衣はのけぞった。粘膜を直接なぞる快感は想像以上だった。自分のしていることが信じられなくて後ろを振り返る。自らの指先で導かれた毛髪が尻の谷間のさきで秘花をとらえている。ポジションを確認すると毛先はより的確に陰部をとらえた。

ああっ――。ラビア全体の形を味わうように毛先を左右の肉びらに這わす。周囲を巡らす焦れったい感覚に熱い吐息を漏らし、快感のポイントを探るように膣前庭の粘膜をなぞる。

（淫欲に身を任せてはいけない、いけないのに――）

後ろを振り向くたびに自分でも目を疑うほどその動きが淫らになっていく。

別の意思を生き物のように穂先を持った右手をぐりぐりと秘裂に押し当て、持ち

上がったヒップは刺激を歓迎するように左右にくねらせている。肉唇を割り開く左手も小ぶりな花びらの内側の粘膜を何度もなぞった。そこはほんの女性器の表層に過ぎないのに、力を入れたらどこまでも沈んでしまいそうなほど濡れた粘膜が吸いついてくる。

（こんなの知りたくない……）

亜衣を不安にさせるのは抜け出せない自慰行為ばかりだけではない。さきほどから視線を感じるのだ。幾度も後ろを振り返るのもそのためである。誰もいない――。それは繰り返し確認しているのに視線がちらつく。宙に浮かんだ何者かの瞳がじっとこちらを注視している。そんなイメージが頭から消えてくれない。それが麻衣を惑わす魔青年・藤原光時の淫力が亜衣にまで及んでいたなどとどうして知り得ただろうか。麻衣が丹念に秘処をまさぐればまさぐるほど淫らの気が充満し、邪な力が増しているのだ。

（熱くなってる。アソコがこんなに……）

ねっとりと粘つき、体の奥まで火照っている。穂先は肉芽をとらえ、初めて味わう刺激に背筋を震えさせていた。クリトリスは処女の急所だ。右手は勝手に動き体がどんな刺激を求めているのか、快感の好奇心に駆り立てられ、突き、押し止め、あるいは優しく毛先で撫でてと、肉体の反応具合を試している。

（こんな姿を誰かに見られたら……）

性器を後ろに突き出した淫らな格好。自らの指先で割り開き、桃色の粘膜をさらけ出しているのだ。到底耐えがたい恥ずかしさのはずなのに同時に興奮が渦巻いている。

亜衣の脳裏に浮かんだ男の瞳が明確になっていた。涼しげでいて、何もかも見透かすような双眸。女が情欲を味わう姿をつぶさにみつめている。這うような視線がはっきりと幻視できてしまう。体がカッと熱くなった。あふれた愛液が内ももをたれ流れている。

――綺麗だ。キラキラ輝いているよ。キミの大事なところをもっとみせておくれ。

頭の奥深くに直接声が響く。亜衣にはそれが巫女として抑えてきた渇望が出した指令のように聞こえた。戸惑いながらも指先に力をこめる。

ヌチャ――。

粘着質な音がした。それこそ女陰の奥でひっそりと息づいていた聖域が口を開いた音だった。ポニーテールの穂先でそこをくすぐった。蜜を吸ってひとつにまとまった毛先を絵筆のように使い円周をなぞる。小さな入り口を念入りに確かめ、その中心もなぞってみた。穴といっても処女の入り口である。充溢した媚肉が道を閉ざし肉畝（にくうね）がせり出している。毛髪はそこをもろに撫でた。

「アンッ……」
ひとつ大きな声が出るととまらない。そばに麻衣がいることも頭から遠ざかり、アッ……アッ……、と甘い声が亜衣の口から出続ける。
麻衣を見た。麻衣の口からも嬌声があふれている。榊を動かす手はリズムを刻み、片手では乳房を強く握りしめている。足指を折り曲げあるいは握り、草履がカサカサと揺れている。オナニーすら初めてでオーガズムなどもちろん知らない亜衣にも頂点が近づいていることが見て取れた。
亜衣も自らを追い込んだ。屹立したままの乳首は指先の愛撫など必要なく、地面の草葉に乳房を押しつぶすだけでも気持ちいい。いっぱいに肉唇を割り開いたまま、リズミカルに穂先を動かす。
――いっしょに。
その気持ちは亜衣と麻衣が固く結ばれた双子ゆえか。
「アアアアンッッ――」
麻衣が腰を浮かせると同時に、亜衣も高々と掲げた尻をさらに浮かび上がらせた。その直後にドサッと崩れ落ち、地面に突っ伏したが、放心状態の麻衣は気づく様子もない。ほうけた顔で麻衣は淫蜜まみれとなった榊をみつめている。けだるく心地よい疲労感。

亜衣も生まれて初めての絶頂の余韻に、しばし大地に身を任せるのだった。地面には一片の花びらが落ちている。大切に女陰の奥に忍ばせていた梅の花の護符が流れ落ちたのだ。

麻衣のみならず、亜衣までもが女の悦びを知ってしまった。

たかがオナニーと切り捨てできるようなことだろうか。男であれ女であれ快感を知ってしまえばまたそれを味わいたくなるのが人間の性だということを我々は知っている。

3

「鬼獣淫界の淫鬼、赤毛鬼推参！　天神子守衆などオレ様がひねり潰してくれる！」

「出会え！　出会え！　皆の者、恐れることはありませぬぞ。かねてよりの手はず通りに迎え撃つのじゃ」

鬼獣淫界、赤毛鬼の怒号と天神子守衆宗家、幻舟の檄が交錯した。

天神子守衆の本営、天津屋敷と天神神社は小高い丘の頂きにある。闇の先兵たる

邪鬼が丘の周囲をぐるりと包囲していた。赤毛鬼の指図で邪鬼の群れが突進していく。長い手足、鋭い爪と牙を持つ邪鬼は敏捷性と跳躍力を併せ持ち、集団で狡猾に襲いかかる侮りがたい敵である。この日のため厳しい修練を積んだ巫女でさえ数人がかりでやっと一体の邪鬼と互角だ。邪鬼は神社の裏手から攻め入った。切り立った崖をもろともせず駆け上がり、津波のように神社に押し寄せた。

だが、進撃はそこまでだった。

鬼獣淫界の襲撃を予見していた幻舟によって神社の周囲を覆う天神結界は強化されていた。人間にとってはごくありふれた神社でしかないが邪鬼にしてみれば天神神社は天険にそびえ立つ要害であった。結界に身動きが阻まれたところに仕掛け罠が炸裂する。仲間の死体さえ踏み台にして邪鬼は押し進もうとするが、聖なる雷撃に撃たれてむなしく散っていった。

「いまじゃ、亜衣、麻衣！」

幻舟の号令に天津姉妹が飛び出す。

「天神招来！　羽衣一の舞！」

跳躍した天津亜衣と麻衣の双子姉妹の姿が重なると光の柱が天まで立ち上がった。光の柱から羽衣軍神へと変身を遂げた亜衣と麻衣が姿を現す。蒼い手袋をつけたのは姉の亜衣。手にした神弓で邪鬼に次々と射かける。紅い手袋をつけているのは妹

の麻衣。薙刀をブンブンと回転させて邪鬼を切り刻む。
すばしっこい邪鬼も結界に動きを封じられては手も足もでない。蜘蛛の子を散らすように無数に湧き出た邪鬼どもがみるみる数を減らしていく。
「むう……！」
ふがいない邪鬼の戦いに憤慨した赤毛鬼であったが、ひとりの少年を見いだした。
天津屋敷の居候、鬼麿（おにまろ）である。戦闘など素知らぬ顔をして天津屋敷へ鼻歌交じりで帰宅の様子だ。どこかへ忍び込んだのか風呂敷を背負った鬼麿は戦利品（おそらく女性の下着であろう）にゴキゲンになっており激闘に気づきもせず、無防備に神社に近づいてくる。
赤毛鬼が狙いを変えた。鬼麿がいるのは結界の外側だ。邪鬼も難なく周囲に集結した。数にものを言わせた邪鬼に行く手を塞がれた天津姉妹よりも一足早く赤毛鬼が鬼麿を抱えた。
「何をする、マロを放せ」
鬼麿は手足をバタバタと振って暴れるが後の祭りだ。赤毛鬼が牙を生やした大口を開いてガハハと高笑いする。
さて？　鬼麿を得た勢いそのままに攻め続けるべきか、いったん引くべきか――。
赤毛鬼は後者を選んだが、欲をかいて判断が遅れた一瞬の隙を姉妹は逃さなかった。

「麻衣、いまよ！」
「わかってる、おねえちゃん！」
亜衣が放った矢が赤毛鬼の右肩に命中し、腕がダラリと下がった。麻衣がそこへ薙刀を振るう。赤毛鬼の腕が切り落とされた。衝撃で天高く放り出された鬼磨をようやく追いついたお目付役の木偶の坊がキャッチする。
「亜衣、麻衣！　やつにとどめを刺すのじゃ」
隙ができたのは今度は天津姉妹のほうであった。救出した鬼磨に目を奪われ、ほっとしたのもつかの間、逃げ出した赤毛鬼にわずかに遅れて追撃する。
赤毛鬼は近くの森林公園へと逃げ込んだ。
「キー、キー！」
指揮官だけでも逃がそうというのか、邪鬼どもが反転して姉妹の行く手を遮る。紅の巫女戦士、麻衣が薙刀を一閃して邪鬼を蹴散らした。
「逃がすものか」
亜衣は走る速度を緩めぬまま矢を射った。森林公園はその名の通り木々の生い茂る自然豊かな公園である。亜衣の放った矢に対し樹木を盾にすると、おもむろに一本の大木にこぶしを叩きつけた。鬼獣淫界の鬼はふつうの人間には不可視の術を使う。公園に居合わせた人々は突風で木が折れたと感じられただろう。砕けた木片が

降り注ぎ、あちこちから人々の悲鳴が上げる。
「いずれまた、相まみえようぞ」
赤毛鬼は混乱に乗じて地中へと消えていった。
「おねえちゃん！」
「いまは町の人が優先よ」
姉妹は変身を解いた。巫女姿に戻った亜衣と麻衣は飛び散った木片の巻き添えになった人々の救助にあたる。多くは軽傷だが直撃を受けて出血した者や昏倒した者もいる。
麻衣は仰向けに倒れた男性を抱き起こした。学ラン姿の若い男である。
「ううっ――」
「あっ、あなたは！？」
麻衣は助け起こした青年の顔に驚いた。
鳳凰学院の藤原光時だったのである。

4

天津屋敷では深刻な事態が起きていた。

鬼磨が床に臥せてしまったのだ。

天津姉妹はあわやというところで赤毛鬼に鬼磨が拉致されるのを防いだ。赤毛鬼の腕を切り落とし鬼磨を救い出したが、その切断された腕から飛び散った血を鬼磨はもろに浴びた。悪いことに赤毛鬼は襲撃前に女たちを犯していたらしい。処女の血までもが混ざった淫鬼の血は、鬼磨に覚醒を促した。鬼磨は天津姉妹と同じく天女の血を引く末裔であるが、同時にその身には鬼の血も流れている。聖性に目覚めれば光の御子に、邪淫に目覚めれば淫魔の盟主となる宿命の子である。

淫鬼の血にまみれた鬼磨は眠っていた鬼の血をうずかせた。鬼磨は獣のうなり声を上げ、目は異様なひかりを灯し、牙が生え、爪が鋭く伸びた。額に生えた角が頭皮を破り、鋭い尖りを覗かせている。

「それがしが目を離したばかりに」

掛ける言葉もないほどにお目付役の木偶の坊は焦燥し、自分を責めた。

やむなく幻舟は社（やしろ）のひとつに隔離した。暴れないよう体に呪法をしたためた布でぐるぐる巻きにされ、護法結界に閉じ込められた姿は幽閉されたといってもよい状

態である。幻舟と木偶の坊、熟年の巫女弟子たちが懸命に悪鬼調伏の祈祷を行っている。

鬼麿の姿は痛々しく、天津姉妹も責任を感じていたが、若い女は鬼麿を刺激してしまうらしい。幻舟たちの手助けもできなかった。

「おまえたちは天津流巫女舞を完成させよ」、幻舟はそう伝えると社に近づくことを固く禁じた。

「せめてとどめをさせていれば」

「わたしがもっとうまくやれていれば」

亜衣と麻衣からも後悔の言葉ばかりが口にでる。

羽衣の継承者といっても力に目覚めたばかりの姉妹には闘うことしかできない。幻舟のように悪鬼を鎮める高度な祈祷術もできなければ敵の動静を探る占術も身につけていない。

自分たちの非力さを痛感するのだった。

◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇

はるか地下深く地中にできた空洞。岩盤が臓腑のように脈打ち、熱い雫がぽたりぽたりと岩を打っている。

巨大な人影に赤毛鬼がひれ伏していた。その巨影こそ、鬼獣淫界の首領・鬼夜叉童子である。赤毛鬼は天津屋敷に襲撃をかける前に、鬼夜叉童子復活の儀式を終えていたのだ。

「よくやった赤毛鬼」

「ありがたきお言葉」

返礼した赤毛鬼の言葉には力がない。切断された右腕のみならず、肩まで大きくえぐれている。肋骨までもがむき出しになりその骨さえ粉となって消えていく。赤毛鬼の首が落ちた。大きな目から光が消えている。天津姉妹は逃亡を許したものの刻まれた聖なる力は赤毛鬼の命脈を絶っていたのだ。

「天津の姉妹め、侮りがたい。だがそれでこそ犯しがいがあるというもの」

赤毛鬼の忠義を見届けた鬼夜叉童子が呟いた。

フーハッハッハッ――。
鬼夜叉童子の地上まで届くような不敵な笑い声がこだまする。

第二章　姉妹と初恋

5

天津麻衣は図書館を訪れていた。

黄色のインナーが特徴の天神学園の制服姿。ショートボブがよく似合う可愛らしい横顔がいつもと違ってみえるのは告白前のような不安げな表情だからだろう。

麻衣が藤原光時を助けたとき、感謝の言葉とともにそっと紙片を渡された。そこには光時の電話番号が書かれていたのである。

鬼磨が大変なときに男と会うなんてと麻衣は思う。電話をすると光時から天神奉納弓試合について教えてほしいと懇願された。天神奉納弓試合は三百年以上も続く由緒ある式典だ。光時は弓試合をただの競技とは考えておらず、来歴も知らずにただ弓を射るようなまねはしたくないのだという。その殊勝な心意気に麻衣は胸を打

たれた。そうなるとお人好しの麻衣には断りがたい。わたしにできることならとつい承諾してしまった。若い生娘はいまの鬼磨にとっては毒だ。鬼磨の容体を考えても自分が神社の近くに居ないほうがよいのだからと言い聞かせた。

図書館に入ると光時はずいぶんと先に来ていたらしく待ち構えていた。光時の熱意は本物のようで机には郷土史が何冊も広げられている。

「今日はわざわざありがとう」

藤原光時は座席から立ち上がり慇懃(いんぎん)に礼をした。端正な顔立ちから白い歯がこぼれている。光時の笑顔を見てこのところの騒動で重くなった心が楽になった。光時にじっと顔を見られているのに気づきちょっと照れてしまう。遠目に練習を見学したときとは違う。いまはずっと距離が近い。

光時に促されて隣に座ると、家から持ち寄った資料を取り出した。

「天神奉納弓試合はその年の五穀豊穣と無病息災を祈念し行われている祭祀です。その原形ははるか平安時代までさかのぼり――」

麻衣は説明をしながら隣の光時から香を炊いたようないい匂いが漂ってくるのに気づく。古風だが光時にはとてもマッチしているように思える。いつまでも嗅ぎたくなる優しく落ち着く匂いだ。代々続く巫女の家系で神社を家代わりに過ごした麻衣にとっては香水などよりよほど慣れ親しんでいる。

ふと机に置いた手に手のひらを重ねられた。
「麻衣ちゃんのことも知りたいな」
「こ、困ります」
自然に指先を絡められた。手のひらを合わせるいわゆる恋人つなぎで優しく手の甲を撫でられる。光時の指は細くて骨張っている。指毛も生えておらず色も白くてどこかセクシーさを感じさせる男の指である。手を握られただけで、麻衣はドギマギしてしまっていた。
（やだ、手汗掻いてるのばれちゃう）
光時は優しげなまなざしで熟視しながら、握り合わせた手から麻衣の気持ちを探るように摺り合わせてくる。明らかに麻衣の手の温度のほうが高い。麻衣は隠しようもないほど手が汗ばんでくるのを感じた。こんなにぎゅっと異性と手を握ることさえ麻衣は初めてであった。心臓までがバクバクと鳴ってしまう。光時にまでその音が届いている気がする。
「ボクのことがキライかい？」
麻衣は左右に顔を振った。それを合図に光時の顔が近づいてくる。麻衣は目を閉じた。唇と唇がふれ合っているのがわかる。
（これがわたしのファーストキスなんだ）

光時はチュッ、チュッと柔らかなキスを続ける。夢のなかにいるような現実離れしたことに麻衣には感じられた。
「光時さん、だめです。こんなところじゃ……」
「大丈夫さ。みんな熱心に読書中だから」
ふたりの唇がまた重なった。

麻衣はやっとの思いで唇を振りほどいた。光時がじっと麻衣をみつめる。
（この目だわ、光時さんのこの目で見られると拒めなくなる）
光時の口づけをまた受け入れてしまう。下唇、上唇、優しいキスを幾度も受けて口元が緩くなる。麻衣は舌を触れ合わせるキスさえ許していた。
「あっ、だめです」
机の下で光時の手が脚に触れている。右手は恋人つなぎをしたまま。片手でしか防御できない。スカートのなかにすっと光時の手が入ってくる。押しとどめようとするが光時の手は力強く太ももの奥へと進んでくる。麻衣はショーツの前を塞ぎ股間を手で覆った。
「大事にしてるんだね」

光時にささやかれる。
「わたし巫女だから」
「じゃあ、麻衣はバージンなんだね」
「……」
麻衣は顔を紅潮させてしまう。これではそうだと認めてしまったようなものだ。耳たぶまで真っ赤になっている。
「麻衣は清らかなんだね。そういうところも好きになってしまいそうだ」
熱を持った耳たぶにキスをされる。乙女の秘密を打ち明けた証明のように真っ赤に染まった耳たぶを愛しげに光時は口づけをした。呼び捨てにされているのに不思議と嬉しくなってしまう。
「うっん、ううっン」
光時に首筋をなめられた。光時のキスはうなじにまでおよび、髪の毛の匂いまでかがれる。「いい匂いだ」、光時に褒められながら唇の愛撫を受けた。スカートのなかの光時の手はそれ以上は昇ってはこなかったが、内ももを握りしめている。
（光時さんにわたしのエッチな秘密を知られてしまいそう……）
握りしめられた内ももの数センチ先、いまは自分の手のひらで覆っている乙女の部分を麻衣は昨日も自ら愛してしまった。そう、光時との電話のあとでオナニーを

したのだ。オナニーの想い人はもちろん光時だ。その本人にいまキスをされている。
まくってしまいたくなるほどスカートのなかに熱がこもっている。じんわりと湧き出る汗に光時は気づいているはずだ。そしてショーツのなかではもっと熱が生まれている。
光時にまたみつめられた。
「キスまでならいいんだろう？」
麻衣はこっくりとうなずいた。図書館内で誰にも気づかれてはいけない口づけを交わしているにもかかわらず光時の瞳は涼しげなまま。いかにも経験豊富そうで女心を何もかも見透かしているみたい。欲情の兆しさえ見抜かれているようで麻衣は怖くなる。
せめて音は立てないようにと麻衣はゆっくりとキスを交わした。光時にリードされながら唇を吸われ、麻衣も光時の唇を柔らかく吸い返す。麻衣の口が軽く開き、光時の舌が入っていく。ふたりの口づけは舌を絡みつかせる濃厚なものに変わっていった。
いけない想像よりも光時のキスはずっと甘美だ。オナニーのなかで光時はあちこちにキスの雨を降らせた。セーラー服に包まれた肌にまでキスを期待してしまう。
いつしか麻衣はじっとできずに、もぞもぞと内ももをこすり合わせていた。椅子

が軋むかすかな音でさえ図書館内のほかの利用客に聞かれてしまうのではないかとドキドキする。
「好きにしていいんだよ。自分のカラダじゃないか」
「ああ、恥ずかしい。絶対見ないで……」
「安心して。ボクはキスしかしないから」
恥ずかしさを隠すように麻衣のほうからキスをねだった。スカートのなかでは光時の手を防いでいたはずの麻衣の指先がいけない動きをしていた。
（すっごく、興奮しちゃう）
夕日が差した裏山でしたとき以来であろうか。それ以上の興奮を麻衣は覚えていた。シーンと静まりかえった図書館内で麻衣の呼吸は次第に荒くなっていった。

6

学校からの帰り道に森林公園を通りかかったとき、思いがけないものを天津亜衣は見かけた。
麻衣が誰かとキスをしている。女にも見間違うほど長髪の男とだ。

夕暮れの人が少ない時間帯とはいえ、周回二キロのコースもある森林公園は憩いを求める人だけでなくジョギングやウォーキングを楽しむ市民もいる。他人の視線など気にならない様子で麻衣と男が熱いキスをしている。

ふたりが顔を離した。男の顔が覗けた。

「あれは……！」

亜衣はハッとさせられた。

男の長髪を見たときから不吉な予感がしたが、果たして麻衣がキスしていた相手は鳳凰学院の藤原光時だった。淫鬼が森林公園で暴れ回ったとき、麻衣が光時を助けていたことは知っていた。救助をするのは当然ながらどこか拭えぬ不安を亜衣は感じていたのだ。

亜衣はどうしてよいかわからず、木陰に隠れた。

（これじゃあ、こないだと同じだわ）

盗み見するように麻衣のひとり遊びをのぞき、初めての手淫を行った先日の出来事をいやでも思い出してしまう。

麻衣と光時がまた唇を重ねた。みつめあい唇を合わせて、またお互いの顔をみつめあう。ふたりのキスは濃厚さを増していく。麻衣が光時の背中に回した手をギュッとさせているのがわかる。

ふたりはかれこれ三十分ほどもキスを交わしあっただろうか。ようやくふたりが別れると亜衣は、ほっ、と声に出るほど大きな安堵をするのだった。

まっすぐ帰る予定を変更し喫茶店に寄り道すると、藤原光時のことを調べてみた。ほうぼうの知り合いに聞いてみても光時のことを悪くいうものはいない。現代によみがえった平安の若武者。品行方正にして学業優秀。美男子ぶりに心酔している女子はともかく男子からも絶賛されている。天神奉納の弓試合に出場することは大変な名誉だ。鳳凰学院弓道部の主将は「彼こそがふさわしい」、と選手の座を進んで譲ったという。

それほどの腕前であれば全国的な知名度があってもおかしくないが、転校前のことはまったくといっていいほどわからない。何かが不自然だ。どうにも気になる。

「ただいま」

亜衣は声をかけて玄関をまたぐ。返事はない。

幻舟も木偶の坊も鬼磨の治療にかかりっきりで社にいるため、家のなかはひっそりとしている。

階段を上がり二階にある自室に向かった。

亜衣と麻衣は同じ部屋を使っている。そろそろひとり部屋をと考えていたところに鬼磨と木偶の坊が居候となったので、双子姉妹は同じ部屋での生活を続けていた。

部屋の引き戸がわずかに開いている。

衣擦れの音がした。心当たりがあって亜衣はそっと近づいた。扉の隙間からなかの様子を探る。

（麻衣ったら）

ひと足早く帰宅した麻衣が部屋にいた。

ベッドに寝っ転がっている。ピンクのルームウェアに着替えた麻衣はコットン地のトップスの上から胸元を揉みしだいている。ハーフパンツはずり落ち、ショーツのなかに手を差し入れている。麻衣が舌を伸ばした。自分の唇を舐めている。

どうやら光時のキスを思い返しながら自慰をしているらしい。麻衣が自分の指を口に含んだ。指先に舌を絡ませている。含んだ指をチュッと吸った。

以前の亜衣ならばそんな妹を目撃してもはしたないとしか思わなかっただろう。けれでも亜衣も自慰を経験し、体の奥から沸き起こる興奮を知っている。麻衣と光時の行為は濃厚だった。あんなキスをしたら余韻が抜けないのが理解できてしまう。

（麻衣、そんな姿見せないで……）

喉が渇く。耐えがたい乾きに負けて亜衣も自分の指を舐めた。

キスとはこんな感じなのだろうか――。男嫌いを自称し、恋愛にはまるで興味のない鉄壁の処女である。亜衣はキスの経験がない。それでも麻衣のように指を吸い、舌を絡めてキスのまねごとをする。

亜衣の脳裏に恋人のように口づけを交わす麻衣と光時が浮かんだ。いや正確にはその唇だけだ。赤く濡れた舌が伸びて絡み合い、こすり合わせる。唾液がアーチを作り落ちそうになる直前に口で吸う。

熱心に妹の自慰をのぞき見する亜衣の左手はスカートのなかに入りこんでいた。快感が昂ぶったのか麻衣が腰を浮かす。ショーツに隙間が開き、熱心に陰部をまさぐる妹の指先が見えた。

ダメよ、こんなこと――。亜衣は自らを叱咤したが渇望に負けて右手まで降りていく。亜衣の右手はショーツのなかまでたどり着いた。左手はクリトリスを転がし、唾液で濡れた右手で淫裂をなぞる。

両手を使った自慰をする自分を亜衣はいやらしいと思うのだった。

（試し読み版はここまでです。是非本編もお楽しみください）

淫宴玩弄・上　性開発される処女巫女姉妹　（試し読み版）

著者　妄想虜囚
サークル　妄想虜囚
カバーイラスト　STUDIO WALTZ
発行日　二〇二一年一二月四日
連絡先　https://ci-en.dlsite.com/creator/5672
http://pixiv.me/mousou02　（ピクシブ）
mousouryosyuu@gmail.com

※本書の無断転載・複製・複写・インターネットウェブサイト上への掲載は固く禁止致します。